告　辞

　東京農工大学を卒業する皆さん、ご卒業おめでとうございます。
本日卒業される学部生は、農学部三百三十四名、工学部五百九十九名であり、本学から巣立ち行く学部卒業生の総数は九百三十三名です。本日は皆さんの学部卒業をお祝いするために、本学同窓会会長、副学長、監事、名誉教授、研究院長、学府長、評議員などの方々にもご臨席いただいております。卒業証書を授与されました皆様はこれまでの研鑽と努力の結果として本日を迎えられました。我々一同、心よりお祝いを申し上げます。同時に、皆さんをここまで支えてこられたご両親をはじめとする御家族の皆様にも、心からの敬意を表し、かつお祝いを申し上げます。
　大学生活は高校時代までとは異なり、みずからの責任と自覚のもとで自らの生活を設計し、それを実行する形へと変わったことと思います。その主体性を基本とする４年間の大学生活では、困難な場面に直面したこともあったかもしれません。それも一つの試練とし、見事に克服して今日のこの卒業の日を迎えられた皆さんは、人間的には一回りも二周りも大きく成長されたことと思います。皆さんが自ら選んで学んだ専門分野においても同様です。大学卒業という人生における大きな区切りを迎えられた皆さんに、改めて祝意を表したいと思います。
　皆さんも既に気付いていることと思いますが、学部教育は、一つの狭い分野の専門家を養成することを目的にしたものではありません。農学や工学という広い分野の中で、専門家となるのに共通して必要とされる基礎力を蓄えることを主な目的にしております。皆さんが選んだ学科は、農学、工学、あるいはより広い自然科学という学問の世界に入る数ある入り口の中の一つにすぎません。学科という入り口が異なることから、多少は景色が違って見えますが、皆さんは「自然科学」という共通の世界を知るための一つのルートを歩き始めたところなのです。学科は異なっても、そこで学んだ多くは共通していることからもそれは明らかです。ここにいる卒業生の皆さんはそういう意味では同じスタートラインにいるといっても良いでしょう。皆さんには、広い分野で活躍できる基礎力が備わっており、したがって、皆さんが自分のルートではないと思っているルートからも自らが目指す目標をアタックすることも可能なのです。そのような多様な可能性のあることを忘れないでほしいと思います。そして皆さんにはその希望を成し遂げるのに大きな力になる若さがあります。多くの先人が言うように、若さは守るよりも攻めること、伝統を受け継ぐよりも新しいものを作り出すことに適しております。躓きを恐れず、色々チャレンジして下さい。そもそも、躓いて転んでしまうことは失敗とは言いません。そこから起き上がろうとしないことを失敗といいます。たとえ困難に直面することがあっても、それを克服しようという強い気持ちをいつまでも持ち続けて下さい。大きな可能性を持って卒業して行く皆さんを、我々は大いに誇りに思いますし、これからの皆さんの成長に大きな期待を抱いております。
　皆さんはこれから社会で活躍していく中で、確実にそれぞれの分野で指導的立場に立つ方々です。そのような皆さんにお願いしたいことがあります。それは、個人のレベルからより広い立場で行動する、いわば地球市民となっていただきたい、ということです。日本の将来を考えてみましょう。日本は超高齢化社会となり、人口が大幅に

減少しつつあります。人口減少とは、今の社会的枠組みを維持すること自体が困難であることを意味します。例えば今ある道路網の維持が困難となり、かなりの部分を切り捨てなければならない日本を想像してみて下さい。その深刻さは現実のことなのです。また、世界に目を転ずれば、温暖化への対応では国の利害が優先して解決の糸口が見えず、食糧不足やエネルギー不足などが深刻化するなど、地球社会の調和ある共存には大きな不安があると言わざるをえません。まさに人類の生存を左右する問題です。このような深刻な問題はまだまだ先の話と楽観できる状況ではもはやありません。では、人類の生存維持を図るためにどうすればよいでしょうか。私は日本の将来、あるいは国際政治力学を決めるのも、結局は一人ひとりの人間が地球の将来を考えたときに、いかに行動するか、その意識にかかっていると思います。地球市民としての個人の自覚に帰着するのだと思います。我々一人ひとりが自己中心的な思考を離れることはいうに及ばず、国家間の利害も超え、地球市民としてグローバルに物事を判断できるようになることが必要なのです。皆さんは「生存科学」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。この二十一世紀にふさわしい新しい科学は本学で最初に提唱されたものです。農学と工学とを融合させ、社会科学をも取り込んで、人類の生存を危うくする二十一世紀が抱えるグローバルな課題を解決するための新しい科学の創生を狙ったものです。生存科学を生んだ本学の卒業生として、皆さんには人類の生存のためにいかに行動すべきか、総合的、俯瞰的に判断し行動する技術者となっていただくようにお願いいたします。

北欧の国ノルウェーでは、上場企業において、その役員の最低４０％を女性にすることを法律で義務付ける女性役員割り当て制度が２００３年から施行されております。フランスやスペインでも同じような動きが進みつつあります。女性の能力を十分に引き出せる枠組みのある組織作りや国作りの重要性が先進国で認識され、そのための整備が進みつつあるわけです。皆さん既にご案内のように、先進国の中で日本は女性が社会的に活躍しにくい国の最右翼となっております。日本政府も、この現状を打破するため、男女共同参画社会実現のために種々の施策を講じつつあります。本学ではその施策に基づく支援を受け、女性が活躍しやすい大学実現のために種々の取り組みを進めてまいりました。女性教員も急速に増加しつつあります。来年の今頃には府中と小金井の両キャンパスに保育園も完成しているものと思います。女性にとって働きやすい大学を目指して着々と改革を進めつつあり、この活動では国からも高い評価を得ております。今年度の本学学部卒業生の中には２３７名の女子学生が含まれております。卒業生全体の２５％が女性です。農学部に限れば４０％は女性ということです。女子学生の皆さん、皆さんは社会に出ればそれぞれ有意義な職に就かれると思います。仕事を続ける上では出産や育児などが大きな障害になりますが、これからの時代はその壁は大幅に低くなるはずです。ある程度の壁が残ったとしても、皆さんにはそれを乗り越え、社会のため、美しい地球持続のために皆さんが持つ優れた能力を大いに活かしていただきたいと強く希望いたします。

東京農工大学では、これまでの永い伝統を礎に、しっかりとした教育と高度な研究を行う世界の教育研究拠点大学となることを目標にしております。幸いにも、本学は各種の客観的なデータからも高い評価を受けつつあり、順調に目標に向かって発展し

ていると考えておりますが、これに満足せず、我々は皆さんの母校としてさらに誇れる大学へと一層の努力をしていく所存です。本学を巣立っていく皆さん、皆さんにも本学をさらに発展させる大きな力となっていただきたいと期待しております。大きな力になるとは、皆さんに社会で大いに活躍していただくことであります。皆さんのこれからの活躍に大きな期待を抱いております。

　それでは、皆様にはこれまでに修得された学識と技術を存分に活かしつつ、高い目標に向けて活躍されますよう祈念し、また、東京農工大学のさらなる発展のため、同窓会活動などを通じて、ご支援くださいますようお願い申し上げまして、ここに告辞といたします。

平成二十二年三月二十五日

東京農工大学長　小畑　秀文